

2025 年6月1日 復活節第7主日礼拝メッセージ

「キリストに結ばれて生きる」

牛田匡牧師

聖書 エフェソの信徒への手紙 4章 1-16節

「キリストに結ばれて生きる」、「キリストに結ばれた生き方」とはどのような生き方のことなのでしょう。今回の聖書の個所で言うと、3 節「平和の絆で結ばれて～」や、16 節「キリストによって、体全体は、支えとなるすべての節々でつなぎ合わされ、一つに結び合わされて～」などで、「結ばれて」という訳語が登場します。現代日本語の「結ぶ」という言葉の意味するところは、「つなぐ、ゆわえる、関係をつける」というような意味ですが、改めて古代日本語である大和語を調べてみると、「むすひ」はあらゆるものを生み出す力という意味で、古く『古事記』に登場する「高御産巢日神」と「神産巢日神」という二柱の神の名前にも用いられているそうです。一見、何もないと思っていたところに、いつの間にか「苔が生す」ように、古くは命が出てくること、生じることが「むす」であり、そこから生きている子どものことを「むすこ」と言ったり、「むすめ」と言ったりすることも、始まっているようです。人知を超えた不可思議な力として、この世界、天地の万物を生成し、存在させる力としての「むすび（産霊）」の力を、古代の人々は常に感じて、それを偉大なものとして「むすびの神」と呼んできた。そしてそれが今日でもいわゆる「縁結び」という言葉などに残っているのだと思います。

さて、そんな「結ぶ」という大和語ですが、「キリストに結ばれて」というのは、離れていたものがくっついて結ばれる、と言うのとはちょっと違うような印象があります。むしろ、6 節「すべてのものの父なる神は唯一であって、すべてのものの上にあり、すべてのものを貫き、すべてのものの内におられます」にあるように、神の力は偉大であり、様々な限界を持っている人間を超えて遥か「上にある」と同時に、「全てのものを貫き、全てのものの内」にも存在している。だから「離れていたものが改めてくっついて結ばれる」のではなく、もともと「一体だった」、ずっと離れたことなどなかった、と表現する方が適当なのではないかと思います。

とはいえ、この「エフェソの信徒への手紙」4 章に記されているのは、エフェソの教会に集っていた様々な人たちが、互いの違いを認め合い、乗り越え合って、一緒

に一つの教会、集会を作ってってください、というメッセージです。1 節から読むと、「招かれたあなたがたは、その招きにふさわしく歩み、2 謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに耐え忍び～」とありますが、この「耐え忍び」は、頑張って我慢して、という意味よりも、むしろ「受け入れ合い」という意味の言葉（アネコーマイ）です。そして 3 節「平和の絆で結ばれて霊による一致を保つよう熱心に努めなさい。4 体は一つ、霊は一つです。それは、あなたがたが、一つの希望にあずかるようにと招かれたのと同じです。5 主は一人、信仰は一つ、洗礼（バプテスマ）は一つです。6 すべてのものの父なる神は唯一であって、すべてのものの上にあり、すべてのものを貫き、すべてのものの内におられます」。要するに、考え方も背景も、住んでいる所も職業も、出自もそれぞれ異なるけれども、それでも目指している所は同じであり、命の神によって生かされていることも同じでしょう、ということでしょうか。

「みんな一緒です」と言った後、7 節では一転して「しかし」という接続詞で、個々人に与えられている恵みについて述べられていますが、この「しかし」は、聖書によっては翻訳していない聖書もあります。私も「しかし」と訳するよりも、むしろ「そしてまた」や「なおかつ」と訳す方が適していると思います。「神からの命、神の力は全ての人の中にある。その上、なおかつ、私たち一人ひとりに、神様からそれぞれの賜物、能力として、それぞれの恵みが与えられている」という方が、意味が通じるのではないのでしょうか。

一人一人に異なる力、賜物、個性が与えられているのは、それぞれの人が好き勝手をするためではなく、共に一つの目標を目指して「教会」や「集会」、「共に生きる場」を作り上げていくためでした。16 節「キリストによって、体全体は、支えとなるすべての節々でつなぎ合わされ、一つに結び合わされて、それぞれの部分は分に応じて働いて、体を成長させ、愛の内に造り上げられてゆくのです」という言葉は、「コリントの信徒への手紙Ⅰ」の 12 章にある「一つの体は様々な部分が組み合わさって出来ている」という言葉にも通じている言葉だと思います。多様な一人一人が、一つに結び合わされて、共に生きていく。それぞれの人が、キリストに結ばれ、キリストの中に生かされている者として、キリストの価値観で歩む時、私たちは

共に生きていくことが出来る。そのように語られているのではないかと思います。

先週 5 月 29 日が、キリストの昇天日でした。来週はイースターから 50 日目を意味する「ペンテコステ」です。その 10 日前、十字架上で死からの引き起こしの後、イエス様は 40 日間にわたって弟子たちに姿を現され、その後天に上げられて、姿が見えなくなった（使徒言行録 1 章）とされています。そのために「昇天日」と言われていますが、「天（シャーマイム）」というのは、「空高く」という意味ではなく、神様の仕事場、目に見えない神が働かれている所そのもののことだと理解することが出来ました。そのように考えると、復活のイエス様も、その姿は見えなくなったけれども、神様はそもそもの初めからすべてのものの上にあり、かつすべてのもののの中にあり、今も私たちと共におられるということ。私たちが神様の中に今、生かされているということ、そのものに他ならないのだと、改めて気づかされるかと思います。

8 節 9 節などには、「高い所」や「低い所」という表現があります。きっと世界中のどこでも、またいつの時代でも、人間には思い通りにいかない不幸や災難がありました。そしてそれを時の人々は、神の罰だと理解したりしてきました。そしてまた神の国、天の国という所はそのような不幸や災難が一切ない理想の場所だと夢想してきたのだらうと思います。そのように考えると、遥かに高い、夢の国から低い世界、この地上に神様が下りてきて、そしてまた天に昇って行ったというのは、両方の世界の断絶、隔たりをよく表しているように思います。しかし、神様は上から下に低い世界に下ってきたのではなく、世界の低みの只中に最も小さな姿としてクリスマスにお生まれになりました。それはその場が見捨てられているわけでも、呪われているわけでもなく、そこにも紛れもなく神様が共におられるということ、そこにも命の神の祝福があるということ、イエス・キリストがその身をもって示してくれたということなのだと思います。

「キリストに結ばれて生きる」とは、言葉を変えると、「命の神に今日も生かされている」ということ。与えられた命、生かされている命なのだから、隣の人命もまた大切にしようと思うこと。イエス様の言葉と振る舞いに従って、歩いていこうとすること。そのことなのではないかと思います。与えられ、生かされている命なのだから、

今日もまた、キリストの内に、キリストと共に、キリストによって、私たちは用いられて
いきます。